

## 傍観者

詩篇 26 : 6~10     マタイ 27 : 15~26

私たちがいつも信仰を告白する使徒信条にこのようなところがあります。「主は聖霊によってやどり、おとめマリアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ」主イエスが苦しみを受けたのは、ポンテオ・ピラトによるのだということです。ピラトは神の子、全人類の救い主、イエス・キリストを殺した、悪名高い、呪われた者になったのです。

ピラトは、紀元前 26 年に第五代目のローマ総督としてユダヤに赴任してきて、十年間に渡ってイスラエルを統治しました。イスラエルの王であったヘロデ・アグリッパ 1 世はローマ皇帝に宛てた手紙の中で、ピラトについてこのように書いています。「彼の性格は無情で冷徹な人で、彼の統治下のユダヤは暴行、強盗、弾圧、軽蔑、たえまない判決なしの処刑、留まることを知らない、耐えられない残虐行為が支配していた」と書いています。ヘロデ自身のピラトに対する感情的な、主観的な見解があったとしても、それは否定できない事実であったようです。今朗読しました聖書を見ると、そのようなピラトの前に神の子イエスが立たされています。

主イエスの権威ある教えと奇跡のみ業を見たイスラエルの大勢の群衆が主イエスのもとに集まってきました。そして、イスラエルをローマの束縛から解放してくださる王としての期待を寄せていたのです。力強いメシア、不思議な権威を持っている方、イスラエルの敵を打ち壊す勝利者を求めているのです。

マタイによる福音書 21 章に子ロバに乗ってエルサレムに現れた主イエスを見て群衆は叫びます。「ダビデの子ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」ホサナはどうか、私たちを救ってください、との意味です。そのようにイエス様を見て喜んだ群衆は、無力なイエス様の姿を見て、今は十字架につけろと叫んでいるのです。

総督ピラトは主イエスに問います。「お前がユダヤ人の王なのか」。主イエスは言います。「それはあなたが言っていることです」。つまり、私はあなたが言っているような政治的な王ではない。私の国はあなたが思っているのと違う、そのようにおっしゃっているのです。政治的な罪を問うつもりであるピラトは黙っておられる主イエスの前で訳が分からなくなっているようです。

大祭司カイアファは主イエスにこのように言いました。「あなたは神の子、メシアなのか」。罪を赦す権威があり、ご自身を神の子として示している主イエスに怒り、神聖冒瀆の罪として裁きました。そして、主イエスの顔に唾を吐きかけ、こぶしで殴り、平手で打ちながら「メシア、お前を殴ったのは誰か。言い当ててみろ」と冷やかしたのです。

彼らはイエスを殺そうとしましたが、ユダヤ法廷には死刑の判決を下す権利がなかったので、総督ピラトのところに渡されたのです。しかし、イスラエルの宗教上の問題に無関心であったピラトに、イスラエルの神聖冒瀆罪は成立できないので、別の罪目をつけたのです。「この人は自分が王だ」と言っています。つまり政治的な犯人として告発しているのです。ローマ支配について強い反感をもっている彼らであったのにもかかわらず、主イエスを殺すためにローマ総督に、自分たちの王はローマの皇帝だと言っているのと同じです。イエスに死刑の判決をくださのに戸惑うピラトに「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。王と自称する者は皆、皇帝に背いています。」と（ヨハネ 19 : 12）脅かしています。自分を王とってカイザルに反乱を起こしている者をあなたが許すなら、それはあなたの王に対する忠誠に問題があるとがめているのです。

主イエスは囚人として引き出され、ピラトは法廷に上り、裁判の席につきました。高い座から神の子イエスを見下ろしているのです。イスラエルの群衆は狂ったように「殺せ、殺せ、イエスを十字架につけろ」と叫んでいました。

ピラトはイエスを断罪しようと思わなかったようです。祭りのたびことに囚人を釈放する前例に従い、どうかイエスを釈放したいという意図さえも感じられます。

ピラトはイエス様が罪がないことを知っていました。人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためであることを分かっていました。自分勝手なピラトの目にもイエスの罪を見ることができなかったのです。さらに彼の妻が言います。「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで私は昨夜、夢で随分苦しめられました。」彼女は夢の中で神様のお告げを受け、夫であるピラトに知らせたのです。

裁判官の座にいるピラトは、イエスに罪がないことを知っていました。そして、妻をとおしての神のお知らせも聞いているのです。しかし、群衆の叫びに屈服してイエスに死刑の判決をくださのです。ピラトは、それ以上言っても無駄なばかりか、かえって騒動が起こりそうなを見て、水を持ってこさせ、群衆の前で手を洗っていました。「この人の罪について、私には責任がない。お前たちの問題だ。」ユダヤ人たちの慣習に従い、自分が罪がないことを証明するかのようには手を洗います。

では、ピラトは本当に何の罪も責任もないことでしょうか。彼にしてはしょうがない事であったと同情できることでしょうか。水で手を洗ったようにきれいに流される問題でしょうか。

ルカによる福音書 16 章にこのような話があります。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していたある金持ちがいました。この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その金持ちの食卓から落ちるもので腹を満たしたいものだと思っていました。犬もやってきては、そのできものをなめました。その対照的な人生を送った二人は死んで、貧しい人は天使たちによってアブラハムのそばに連れていかれました。つまり、天国に行ったのです。しかし、金持ちはまだえ苦しむ陰府へ、地獄に落ちてしまったのです。金持ちはラザロに悪いことはしていません。金持ちは自分が持っている自分の財産で楽しんでいただけです。倫理的に罪を犯してはいたのです。

しかし、金持ちは地獄に行かれました。罪を犯した者になったのです。なぜでしょうか。金持ちは隣人の痛み、苦しみに無関心であったのです。苦しむうめいている人の前で、目を閉じ、自分自身を満足させる人生のみを送ったのです。自分自身の幸せと安全以外、他人の姿、神さえ見えなかったのです。自分自身以外には傍観者としての人生を送ったのです。

まして、裁判官として正義を行い、罪ない者を自由にし、罪ある者を裁く、その責任の座にある者が自分の身を守るために罪なき者を殺したことは、それこそ彼の罪なのです。イエスを釈放するならば、自分が殺されそうな状況の中で、しょうがない事であったと弁明することはできません。ピラトは傍観者としての罪の上、さらに職権濫用の罪を犯しました。良心に従い正しい判決をしなかったのです。何よりも神の子、救い主を殺した呪われた者になったのです。権力と富に捕らわれ、無数の血を流したピラトにも真実を語る機会を、神様は与えてくださいました。その妻を通して神様のみ声を聞かせたのです。すべての罪が赦される救い主イエスを、彼は罪ある者にしたのです。罪を裁くものがかえって、罪を犯し、救い主の前で罪が問われる身になってしまったのです。

ある有名な、素晴らしい話を紹介します。

第二次世界大戦中、リトアニアのカウナスの日本人総領事館で働いていた杉原千畝さんは、ナチスの迫害によって欧州各地から逃れてきた多くのユダヤ人亡命者を助けました。彼らはポーランドからナチの手からやっと逃れてきた人たちでした。ナチスの手がだんだん近づいて来る中で、日本政府から出るビザを手にする、ロシアを通して日本に来てそこから他の国へ行って自由の身になることができたので、ビザを得るために押し寄せてきました。杉原さんは、東京に連絡をしましたが、ユダヤ人へのビザ発給は禁止され、いくら連絡をしても拒否されました。ついには、連絡もしないようにと命じられました。その命令に背くならば、その家族は恥を受け、命さえ危なくなるかもしれないが、彼は悩み、一晩中考え尽くした末、彼は妻由紀子さんと共に 29 日間、ビザを発給し続けました。サンドイッチで食事をしながら殆ど眠れなかったようです。ついに日本政府は杉原さんに領事館を閉じて、日本に帰るよう命じられ、汽車が発発するその瞬間までビザを発給し、ビザのスタンプを投げてあげたのと伝えられています。日本に帰った彼を待ち受けていたのは、その責任を負ってその職務から追い出されることでした。その後商社などに勤めることとなりますが、1974 年「イスラエル建国の恩人」として表彰されます。そして、1985 年彼はイスラエルの最高勲章をもらうこととなります。2000 年には、日本政府によって公式な名誉回復が行われました。杉原さんを通して救われたユダヤ人は 6000 人を越えたそうです。

杉原さんはクリスチャンでした。

私たちの人生において傍観者としての生き方はあり得ないことです。

私たちの最後の日、飢えている人に食べさせなかったこと、のどが渴いている人がいた時に飲ませなかったこと、旅をする人に宿を貸さなかったこと、裸の人に着せなかったこと、病気の人の見舞いをしない、牢にいる人を訪ねなかったことが主に問われるのです。(マタイ 25 : 35 ~)

主イエスが十字架で刺しつらぬかれたのは、私たちの背きのためであり、主イエスが打ち砕かれたのは私たちのとがのためでありました。主イエスの受けたこらしめによって私たちに平和が与えられ主イエスの受けた傷によって私たちはいやされました。そのような主イエスの恵みを受けた私たちはどのように生きるべきでしょうか。私は今何ができるのでしょうか。主イエスの愛によって生かされている私たちはピラトのような傍観者にはなりたくないのです。

祈ります。

主よ、困難が多いこの世の中で、自分の安全のみに、閉じ込められないように、このような時にこそ、すべてを尽くしてあなたを愛し、隣人を愛していくことができますように。主よ、傍観者としての罪を犯さないように、どうか私たちを導いてください。主イエスのみ名によって祈ります。アーメン。